
私の歩く道

上村華月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の歩く道

【Nコード】

N4272Y

【作者名】

上村華月

【あらすじ】

若くして父親のあとを継ぎ国会議員になつた晴香30歳。身の回りが全て利権によつて支配されていることを知るも、認められないがために行き着いた道の先には……。つたない文章ですが、読んでいただければ幸いです。

国会議員

私は国会議員の吉岡晴香^{ヨシオカハルカ}30歳。地元からの根強い支援があつて、衆議院議員に当選した。ちなみにこの仕事は始めたばかりだ。

そもそもの選挙出馬のきっかけは父が衆議院議員だったこと。そして父が高齢になったので、代役として私に立候補の機会が訪れた。それまでは、父の口ききで入社した土木会社にて事務の仕事をしていた。

というわけで今日も国会で会議。話の焦点は私の地元に高速道路を作るかどうかだ。

「財政削減が叫ばれている中、なぜこのような人の少ない場所に高速道路を作る必要があるのですか？」

いつもと同じような質問に、私はいつもと同じ事を言う

「高速道路がないから人が少ないんです。」

そしていつも同じ返事が返ってくる。

「だから人が少ない場所に高速道路を作っても誰も利用しないでしょ？」

さらにいつもと同じ事を繰り返し伝える。

「いえ、高速道路がないから人が少ないのであつて、道路が出来て産業が発展すれば、人が増えて利用者も増えるはずですよ。」

私は40年前に作成された計画を手に持ち、話を続けた。

「当初の計画を見てください。ここに道路を作る計画があつたじゃないですか。なぜ今まで作られていないのか、まさにこれは国民に

対しての冒涇としか思えません。一度決めたことはやるべきです。国民の期待と信頼を裏切り続けているこの状況を打破するため、この会議は道路を作るか作らないかの話ではなく、早期の建設を実現するためにどうするかという前向きな話をする場ではないのですか？」

・ ・ ・ 要するに私は俗に言う道路族なのだ。

私を当選させてくれた地元民の多くは、土木関係の仕事をしている。道路を新しく作ることになれば、彼らに仕事が舞い込み、恩恵を受けることが出来るという流れだ。だからどんなことがあっても、私は地元道路を作らなければならない。出来ればコストのかかる高速道路が望ましい。もしそれがたとえ誰も使わない道だとしても・ ・ ・

「ふう、今日も終わった。」

議員宿舎に帰り、一人ホットティーを煎れ、テレビをつけた。ニュース番組で今日の会議が流れていた。私の発言シーンがしっかり写っていた。

そしてコメンテーターの発言はこうだ。

「40年前と今は状況が違いますからね。ましてや道路は維持費がかかりますから、作るだけでは終わらないということまで考えて欲しいものですね。」

そして高速道路建設予定地のビデオが後ろで流れ始めた。正直言つて山道もいいところだ。車は当然通らない。

そして地元民のおじさんにインタビューが及んだ。

「ここに高速道路が出来ると話知ってますか？」

「いやー知ってつけど、この道誰も通らないよ。ほら、ずっとまっすぐ行くと2軒住んでるでしょ、佐藤さんのおじいちゃんとかさ。けどおじいちゃんもう目が悪くなっちゃって車乗ってないみたいだよ。」

きつと国民のほとんどが私を敵だと思っているに違いない。そう考えながら今日もベッドに入る。

彼氏

今日は久しぶりのサラリーマンで同学年の彼氏とデートだ。
軽くブラインドショッピングをした後、大衆向けレストランに入っ
た。

ずわいガニのホワイトソースパスタを注文した。

「なあ晴香、昨日テレビ見たよ。また写ってたなお前。」

「うん、また写っちゃった。」

「そのさあ、何ていうかやめられないの・・・今作ろうとしている
道路計画？俺さ、何かああいうの見るたび辛いんだけど。」

「何で辛いのか？」

「だってさ、道路必要ないじゃん明らかにさ。誰も使わないんだろ
折角作ってもさ。」

「使わなくてもいいの。」

ずわいガニパスタはまだ来ない・・・早くこの話を終わらせたいと
晴香は強く思っている。

「てか晴香さ、はつきりしようよ。道路を作れば確かに地元の土木
関係者は嬉しいけどさ、折角作っても誰も使わないなら、それかも
っと別なところに作った方がいいんじゃないの？てか早くどこでも
いいから作って楽になったら。」

彼氏の名前は博^{ヒロシ}。私が国会議員になる前から付き合っている高校の
同級生だ。だから基本的に私の仕事を基本的に応援してくれている。
ただ最近友達から私の政策について結構文句を言われているようで、
よく道路の話をしてくるようになってしまっている。

「もつと別のところって例えばどこ？」

私の本当の支援者は博しかない。それ以外の支援者はみんな利害関係でガチガチだからだ。お父さんもそうだ。だから私は博のこういうやさしい言い回しが出来て、さらに素直に何でも話せるところが好きだというのもあって、博の言うことは聞くようにしている。

「だからさ、晴香と土木の人の関係ってのは切れないでしょ。それは良く分かってるつもりだよ。だから別のもつと人のいるようなところに作れないのかってことさ。」

「私達の地元は基本土木でその他農業、んでそれ以外に仕事がないの知ってるでしょ？だから絶えず何かを作っていないと、働き口がないの。けどもう今議論している場所しかないんだ。作るべきところは全部作っちゃったから。」

「うーん、それはなんとなく分かるけどさ。」

「しかも町や市には作るお金も無いの。仕事が無いから税收もないでしょ。だから国家予算を使っしかないんだ。」

「それはさ、晴香のお父さんの考えだろ、晴香はさ、今は実際どう思ってるの？お父さんの役割を受け継いだってのはわかってるけどさ。」

「私は町の人に仕事があって、明るく生活出来ればって思ってるの。これは本当だよ。ただ・・・」

「ただ何？。どうしたの？」

「道路はあんまり作りたくないの。」

確か1ヶ月前にも、さらにはその前も、博と道路の話をしたのを覚えてる。ただ博は私にこの一言が言わせただけなのかもと考えてしまうが、最後にこう言ってくれる。

「晴香は明るいから、きっといつか町の人も明るくしてくれるって思ってるよ。それが国会議員の仕事じゃなくてもね。けど晴香が選んだ仕事だから、俺は応援するよ。この際早く別の場所に道路を作って楽になるでもいいからさ。」

ようやくカニパスタが運ばれて来た。二人無言でカニの身を必至に食べ始めた。600円でさらに「ずわい」ともなるととっても小さい。沢蟹みたいだ。

会議

翌日、今日も国会では高速道路の話しをしている。

「吉岡議員、先日のテレビ番組はご覧になりましたよね、2軒の民家ために高速道路がそれでも必要なんですか？」

「あのテレビで発言をしていた方がどなたか存じ上げませんが、調査されたんですか？」

私はこう言って高速道路の話をそらした。

「調査も何も、すなわちあの番組はやらせだとおっしゃいたんですよね？吉岡議員。」

「いえ、そのような意図の発言は行っていないせん。」

そしてこの日は私の発言について議論が繰り返され、道路の話はしないで済んだ。

翌日も、国会で高速道路の話しをしている。

「吉岡議員、昨日は話が少しそれてしまいましたので、再度お聞きします。国家財政がこれほどまでに悪化しているのに、それでも高速道路がそれでも必要なんですか？」

「ですから、高速道路がないから悪化してしまっているんです。テレビでご覧になったと思いますが、そもそも高速道路がないので人がほとんど住んでないんです。」

質問者がイライラしているのが良く分かる。

5年間も繰り返し返される変わらないやり取り。

そしていつまでも判断を下さない政府にはきつと国民もイライラしているはずだ。

ちなみにその内の一人に私も含まれている。

仮に私が折れればそれで多数の人のイライラが収まるだろう。ただそうした場合、私の支援者はイライラしてしまう。

本当はもっと前向きの話がしたいのに……。

いつもそう思っている。だけどこの仕事は辞められないのだ。

一旦受けてしまっているし、もし辞めてしまうようなことがあれば、後にいろいろ面倒なことが待っていることが容易に想像できる。

事務員で退屈だった私にとって、父の後継者の話はとても魅力的に感じた。地方の会社に親のコネで入った私に、ようやく輝かしい未来が訪れたかのように見えた。先に上京していた博に頻繁に会えるようになることも一つあった。

ただ、今は一旦受けてしまったことで、がんじがらめになってしまっていることを知っている。地方にいた自分にとっても魅力的に写った未来が現実になり、私は自分の居場所が故郷にあることをひしひしと感ずるようになった。

高速道路建設反対派に寝返ってもいい。というか今更他人のことはどうでもいいとも考える。

そしたら、自分の居場所である地元に帰れなくなる。支援者からの

嫌がらせも避けては通れないだろう。

自分の居場所を守るために、道路族を続けるか、それとも居心地の悪い場所に留まり、自分の居場所を守るか・・。

この板ばさみから解放されるのはいつになるのだろうか・・。

考えれば考えるだけ気持ちが閉ざされていくのを感じた。

癒着

今日は雨、議員宿舎から国会議事堂まではタクシーを利用している。朝9時からまたまた道路関係の会議が始まった。

「吉岡議員、過去のあなたの選挙区の高速道路建設の受注先について調べましたが、あなたのお父さんは何か言っていないませんでした？」

「質問の意図が良く分かりません。」

「ですから、毎回同じ業者を使用しているんです。建設の公募には毎回10何社も応募があるのに、毎回同じ、しかも予算比99.9%での受注です。」

「質問の意図が良く分かりませんが、父が談合に参加していたとおっしゃりたいのでしょうか？」

「そうは言ってませんが、ただ吉岡議員はこの事実を把握されていましたか？」

「・・・私は知っていた・・・。」

請負先の業者の社長が博のお父さんだってことは知っていた。

ただ受け入れられていなかった。

私の父の任期中にはこのことが明るみ出ることとはなかった。今思えば父の引退はこれを恐れてのものだったのかも知れない。

その疑念が確信へと変わり、目の前が真っ暗になった。

「高速道路は不要です。以上」

私はこの一言を発し、会議室から飛び出した。

溢れる涙が止まらない。どこに向かえばいいのかも分からない。

故郷には帰れない。実家にも帰りたくない。誰も信用できない。

行きついた先

今私は行く宛てもなく、博の家に身を寄せている。

私が泣いたあの日は、私が地元と決別をしてしまったとても重要な日。

そんな日ではあるが、この会議の存在自体は記録からもみ消されたい。誰が工作したのかは今更どうでも良いのだが、おそらく道路族の議員やOBがやったことと思う。

だから世の中の誰も私が意見を翻し、議員を辞めた本当の理由を知らないことになっている。しばらくして家に議員辞職届けが送られてきて、サインをしただけ。

要らないと分かればあっさり消される。いずれ暴力団とかそういう人が家に来て、私に嫌がらせをしてくるだろう。海に沈められるかもしれない。

博に迷惑がかかってしまうかもしれないと考えると、彼の笑顔が脳裏に浮かび、辛くてやりきれない。

リビングのテーブルの上に、一通の手紙を置いて私は立ち去ることにした。

「あの事件があってから、私達はあまり深い話が出来てないよね。ある時はひよっとしたら博が私に気を使ってくれているのかなとか、良い方向に考えたり。ある時は博が、自分に身に危険が及ぶような

浅はかな私の行動を怒ってあきれているのかななんて考えてるよ。けどどっちにしても余計なことをしたばかりに思ってる。本当にごめんなさい。けど、謝ってすむような問題でもないだけに、どうしたらいいのかも分かりません。

私はしばらく旅に出ます。どこに行くか決めてないけど、帰ることがあれば連絡します。博の優しいところが好きでした。けど博がよく言ってくれた明るい私ってものには、きつとずっと一生戻れないと思います。いままでありがとう。勝手に別れごめんなさい。けど、もうこれしか今の私には出来ません。さようなら。」

結末

私が議員をやめた後、新聞で地元の選挙区から博が当選したことを知った。

見えては来ないが、確実に存在する大きな力の中にいる自分という小さな存在。そして、何より道路に隠された魅力。今私が歩いている平凡な道にも、きっと想像以上の思惑と税金が使われているのだらう。

参考―

ぞくぎいん

族議員とは、日本の特定の省庁についての政策知識に明るかったり、人脈を築いたりする中で政策の決定権を握り、業界団体や利益団体の利益保護に影響力を持つ国会議員およびその集団のことである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4272y/>

私の歩く道

2012年1月14日17時00分発行